

日銀神戸 支店長の 視点

別所昌樹氏



今年は、昭和元年から満100年に当たりますが、神戸の昭和は波乱に富んだ幕開けでした。総合商社の鈴木商店は、改元数カ月後の昭和2年3月に起こった金融恐慌をきっかけに破綻しました。川崎造船所も、松方幸次郎社長の兄の巖が頭取だった第十五銀行が休業した余波で事業の整理を余儀なくされました。2人の父は、日銀創設を提案した大藏卿の松方正義でした。この金融恐慌の最中の昭和2年6月、日銀神戸支店は開業しました。神戸市立博物館北隣の今はホテルがある場所に、辰野金吾の弟子である長野宇平治が設計した古典主義様式の店舗が設けられました。

過去100年を振り返る

波乱の「昭和100年」を不死鳥のごとく

と、神戸は金融恐慌だけでなく、昭和13年の阪神大水害、昭和20年の神戸大空襲、平成7年の阪神・淡路大震災と幾多の困難に見舞われました。そして、そうした困難を不死鳥のごとく乗り越え、発展してきました。鈴木商店や川崎造船所をみても、両社を源流とする企業はさまざまなかたちで再生し、今日も神戸の、そして日本の経済を支えています。日銀神戸支店もまた、人々が安心してお金を使えるようにすることで、当地の発展をお手伝いしてきました。ところで、昭和という元号は、「百姓昭明、協和万邦」という書経の一節からとられたそうです。人々がそれぞれ徳を明らかにすることで、世界の国々が協調して繁栄する、といった意味です。いまだ世界に紛争は絶えませんが、日銀神戸支店には、神戸大空襲で消火活動に携わった職員9人が殉職したというつらい経験もあります。「昭和」という元号に込められた願いは、今日でもなお重みを失っていないと思います。